



# バッハの森通信

第 147 号  
2020 年  
4 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : [info@bach.or.jp](mailto:info@bach.or.jp)

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

## コロナ・ウィルスに勝つために 心のパンも必要

新型コロナ・ウィルスが引き起こしたパンデミックで、世界中が大騒ぎになりました。状況が刻々と変わるので、今、4月初めですが、この『通信』が発行される数週間後に、日本と世界がどんな様子が見当がつかえません。もちろん、感染が終息に向かっていることを願いますが、かえって拡大してるかもしれません。

\* \* \*

バッハの森では、3月22日に予告通り、「創立記念コンサート」を開きました。感染防止のため、各地で各種のイベントやクラシックのコンサートも中止されているので、バッハの森もコンサートを中止すべきではないか、という声も聞こえてきましたが、3月14日の運営委員会で、出来る限り感染防止の準備をしたうえで開くことが決まりました。入り口に消毒用アルコール・ティッシュを置き、奏楽堂の椅子を前後左右に十分間隔をとって、普段60席置くところ40席にしたり、隙間風防止の板を取り払って換気をよくし、コンサート後のオルガン見学会や、お茶の会も取りやめにしました。

もちろん、これで感染防止が100パーセントできる自信があったわけではありません。それでもコンサートを開くことにしたのは、当時、茨城県にはまだほとんど感染者がいなかった状況に加え、このコンサートが、そのため熱心に練習してきた音楽を発表できる唯一の機会だと思ったからです。しかし、それだけではありません。総理大臣をはじめ都知事、県知事たちが国民に向かって要請し始めた「不要不急の外出自粛」

の定義に、いささか疑問を感じたからです。このウィルスの感染が人と人の接触によって起こることが明らかな以上、彼らの要請が正しいことは間違いありません。しかし、私たちの「創立記念コンサート」に参加することが「不要不急の外出」にあたるのか、という疑問です。

「創立記念コンサート：涙から復活へ」の参加者は全員で30名。その内訳は、演奏者側が16名、会衆が14名でした。(バッハの森では、音楽の演奏を聴く側の方々にもコンサートに参加する意識を持っていただくことを願って「聴衆」と言わず「会衆」を呼びます)。お茶の会を省略したせいで、会衆の皆さんの声を聞くことが余りできませんでしたが、いつもの通り、演奏した皆さんは達成感に満たされ大変上機嫌でした。敢えてコンサートを開いてよかったのです。

\* \* \*

私は小学校に入学する前から、明治14年(1881年)生まれの父に、聖書の有名な箇所を暗記させられました。これは10歳のときに死別した父が育てられた教育法だったようです。当時、聖書は文語訳しかなく、ほとんど理解できませんでしたが、説明された覚えがありません。とにかく大きな声で、父が言った通り繰り返すという教育でした。印象に残った聖句に「人の生くるはパンのみによるにあらず」というイエスの言葉がありましたが、私は長いこと、パンという樹の実で人は生きられない、という意味だと思っていました。

知事さんたちが「食料を買いにスーパーに行くのは不要不急の外出ではない」と説明しているのを聞いて、突然、この滑稽な誤解を思い出したのです。「人はスーパーの食料品を食べているだけでは生きられない」という真理を、外出自粛をしなければならない状況下でも忘れてはならないのではないのでしょうか。心のパンを求める皆さんが、バッハの森に再び集まれる日が近いことを願っています。(石田友雄)

## 涙から復活へ

### 古代イスラエルが残した 偉大な文化遺産「聖書」

\*このメディタツィオは、3月22日に開かれた「創立記念コンサート：涙から復活へ」で朗読されました。

現在、中近東と呼ばれている地域には、かつて偉大な文化圏がありましたが、その詳しい全貌は、19世紀以来の発掘調査によって発見された、粘土板や石碑などに刻まれた文字が解読されるまで忘却されていました。しかし、200年に及ぶ熱心な研究の結果、現在、私たちは、古代オリエントと総称される文化圏について多くのことを知っています。

それによると、紀元前3500年頃、チグリス・ユーフラテス河口にシュメール人が都市国家群を建国し、また同じ頃、上下エジプトを統一した第1王朝が成立してから約3000年におよぶ多彩な歴史があったことが分かりました。そして、紀元前5世紀から4世紀にかけてペルシャの西方遠征がギリシャ人に撃退され、逆にアレクサンドロスが東方に遠征してペルシャ帝国を滅ぼしてから、ギリシャ文化圏、すなわち、ヘレニズムが東方にも広がり、さらに地中海全域を征服したローマ人の政治的覇権が確立したとき、古代オリエントは終焉しました。

#### 読み続けられた「聖書」の奇蹟

それまで、古代オリエントに関する情報源は、古代ギリシャ人が伝えたわずかな伝承以外は、主に「聖書」だけでした。「聖書」は、それまで伝えられてきた文書を、紀元前400年頃から数百年かけて編纂した書物で、その言語であるヘブライ語とアラム語が読めなくなったことは一度もありません。これは古代オリエントの歴史を通じて、他に例を見ない奇蹟的な現象なのです。ただし最後に古代オリエントに進出したペルシャ人は、これを統一して約200年間支配した後、結局、オリエントから追い払われてイラン高原に戻り、その後、イスラム教徒のイランとなって現代に至る歴史を歩きました。イランでは現代ペルシャ語が使用されています。

このようなわけで、ペルシャ以前の古代オリエントの覇権は、主としてメソポタミアのバビロニアとアッ

シリア、小アジアのヒッタイト、それにエジプトによって争われました。彼らはそれぞれ強力な軍事力を持ち、しばしば東地中海沿岸のシリア、パレスチナまで支配しましたが、彼らが、くさび形文字やヒエログリフで記した膨大な諸文書は、紀元前1世紀頃までに誰も読めなくなりました。この状況は古代オリエントの終焉を象徴しています。

古代イスラエルとその後継者であるユダヤ人は、古代オリエントで活動した弱小な一族にすぎませんでした。しかし、アッシリア、バビロニア、エジプトなどの大国が達成した偉大な業績が、古代オリエントの終焉とともに一度忘却されたのに対して、「聖書」は一度も忘れられることなく、現代に至るまで伝えられてきました。この違いはどうして起こったのでしょうか。

#### 文学と歴史の違い

メソポタミアの人々も、例えば「ギルガメシュ叙事詩」のような優れた文学を残しました。では「ギルガメシュ」と「聖書」はどこが違うのでしょうか。「ギルガメシュ」が一人の英雄を通して、人間が死すべき存在であることの悲しみを描くのにに対して、「聖書」は、モーセやダビデのような偉大な人物について語る時に、常に彼らがイスラエル・ユダヤ民族の中でどのような役割を果たしたかという報告をします。同様に、アッシリア、バビロニア、エジプトなどに強力な王が出現すると、彼らの軍事的功績は詳しく記録されましたが、それがそれぞれの民族の歴史とどのように関わったかということについては余り語られません。これに対して、「聖書」は、古代イスラエル人が、神ヤハウェとの対話を通して歩んできた民族の歴史に基づいて、自分たちが生きるべき道を指し示した指導者たちについて語るのです。

#### アブラハム契約、シナイ契約、ダビデ契約

伝承によると、ヘブライの遊牧民であったアブラハムが神に選ばれて親族から別れ、ヤハウェが約束した土地を目指して旅立ったとき、彼はイスラエル民族の先祖になりました。そのとき、アブラハムに与えられた使命は、地上のすべての民族の祝福の基となることであり、同時に彼に広い土地と多くの子孫が約束されました。これを「アブラハム契約」と呼びます。彼を実在の人物として歴史に位置付けることは困難ですが、その後、イスラエル・ユダヤ人は現代に至るまで、自分がアブラハムの子孫であることを自覚してきました。

次に「聖書」は、アブラハムの子孫であったヘブライ人たちが、奴隷にされていたエジプトから脱出した物語を伝えます。この物語には第19王朝のファラオ、ラメセスの名前が出てきますから、紀元前13世紀に起こった事件だと考えられます。奴隷であったヘブライ人たちを率いてエジプトを脱出したモーセがシナイ山に到着すると、そこまで彼らを助け導いた神ヤハウェが、彼らを「聖なる民族」として選び、彼らが守るべき掟として「十戒」を始めとする「律法」を与えると告げました。このときヤハウェとイスラエルが結んだ約束を「シナイ契約」と呼びます。この契約を通じて、イスラエルは民族になりました。

その後40年、神から与えられた「律法」を納めた「箱」を持ち運びながら荒野を放浪したイスラエル人は、モーセの後継者、ヨシュアに率いられて約束の地カナンに定着しました。こうして遊牧民から定住民になりましたが、12部族がゆるやかに結合した共同体にすぎなかったため、ときには部族間で争い、外敵の侵略にもしばしば悩まされ、安定した生活を送ることができませんでした。しかし、紀元前11世紀に、最強の外敵であったペリシテ人と戦って勝利し、イスラエルの諸部族を統一したユダ族出身のダビデは、エルサレムを首都とする王国の建国に成功しました。彼は民族統一の象徴として「シナイ契約」の契約文書である「律法」を納めた神の箱をエルサレムに搬入し、それを安置するための神殿を建立する計画を立てましたが、その計画を実行したのは、彼の後継者、ソロモンでした。

ダビデとソロモンが全イスラエルのみならず、周辺の諸民族まで支配した紀元前1000年前後は、北のメソポタミア、南のエジプトで共に内紛が続く、両国とも弱体化していた時代でした。この機に乗じて空前絶後の繁栄と安定を確立したダビデ・ソロモン時代は、黄金時代として古代イスラエル人の記憶に刻み込まれました。このような時代背景の下に、神ヤハウェが、地上にその名を置くために選んだ唯一の場所であるエルサレムと、それを守るダビデ王朝は永遠に続くという約束を、神がダビデと結んだという信仰が生まれました。「ダビデ契約」です。

ソロモンの死後王国は分裂、ダビデ家の支配を拒否した北方10部族は分離独立して北イスラエル王国を建国し、南ユダはユダ族とベニヤミン族だけの弱小王国になりました。しかし、「ダビデ契約」に基づいて、エルサレム神殿だけがイスラエルの正統な神殿である、というユダの人々の信仰は揺るぎませんでした。紀元前722年に、アッシリアが北イスラエル王国の首都サマリアを占領し、北王国は滅亡、北方10部族はオリエント各地に捕囚されてちりじりになり、歴史か

ら姿を消しましたが、その20年後の701年に、アッシリア軍はエルサレムを包囲して降伏を勧告しました。このとき、預言者イザヤは、ヤハウェが「ダビデ契約」を守ってエルサレムをアッシリアから救ってくださる、と告げてヒゼキヤ王を励ましました。事実、そのときアッシリアに内乱が勃発したため、アッシリア軍は包囲を解いて退却しました。

その120年ほど後、紀元前589年にバビロニア軍に包囲されてエルサレムに立てこもった人々は、無謀な神だのみをして3年間、戦い続けました。このとき、預言者エレミヤは、すぐ降伏すれば命を助けてもらえるし、エルサレムも破壊されないですむと、勧告しましたので、裏切り者として捕らえられ、危うく殺されるところでしたが、ツエデキヤ王に助けられ、かくまわれました。結局、586年にエルサレムは占領され、徹底的に破壊されて、ユダ王国は滅亡、王子たちを始め高官たちは処刑され、両眼をえぐり取られた王は足かせにつながれて、他の人々と一緒にバビロンに捕囚されました。

このように、外敵に対してエレミヤは、イザヤと反対の立場をとりましたが、彼も「ダビデ契約」を信じていたことにかわりありません。イザヤもエレミヤも「ダビデ契約」による無責任な神だのみを退け、神の守護に任せる信仰に基づいて、危機に直面している民族がとるべき正しい道の選択を王に進言したのです。

## 民族史の再確認

それにしても、紀元前586年のユダ王国の滅亡は、このとき古代イスラエルが他の弱小諸民族と同じように、歴史から姿を消しても不思議ではない瞬間でした。事実、すでに述べた通り、その130年ほど前、紀元前722年に、アッシリアに首都サマリアを占領されて北イスラエル王国が滅亡すると、北方10部族はオリエント各地に捕囚されて歴史から姿を消しました。では、どうして、同じように王国滅亡と故国から遠く捕囚されたユダの人々が、民族絶滅の危機を生き抜き、民族のアイデンティティを維持することができたのでしょうか。

驚くべきことに、50年続いたバビロン捕囚時代に、バビロンに捕囚された人々も、廃墟になったエルサレムに残っていた人々も、後に「聖書」の主要部分になる重要な文書の収集、編纂をすると同時に、多数の新しい文書を作成しました。一例をあげれば、ヨシュア記から列王記に至る申命記派歴史書、エレミヤ、エゼキエル、第二イザヤ（イザヤ書40～55章）などの預言集です。これらの文書は、すべて「ダビデ契約」の信仰に基づく民族史の再確認であったと言えます。

エルサレム神殿の永続と、それを守るダビデ王家が

永遠に続くという、神がダビデにした約束が両方とも破られ、神殿は瓦礫と化し、ダビデ王家の支配も終わったとき、ユダの人々は、なぜこのようなことになったのか、イスラエルの神ヤハウェはバビロンの神マルドックに負けたのか、という疑問に必死で答えを探しました。その結果が民族史の再確認だったのです。

### 哀歌と詩篇 137 篇

このとき、かつて女王のように振る舞っていたエルサレムが、今や哀れなやもめのようだ、とエルサレムの都を女性に擬人化して、その哀れな姿を歌った詩人がエルサレムに残っていました。後に彼は預言者エレミヤであったと考えられ、これらの詩文は「エレミヤの哀歌」と呼ばれるようになりましたが、多分、彼とは別の詩人たちの作でしょう。5曲ある哀歌のうち、これから朗読と合唱が歌う第1の哀歌の第5節(へー)に、(これらの不幸は)「主、すなわち、神ヤハウェが、彼女、すなわち、エルサレムになさったのだ、彼女の多くの背信のゆえに」という箇所があります。ユダが民族絶滅の危機に陥ったのは、ヤハウェが「ダビデ契約」を破棄したからではなく、ユダが掟を破り、ヤハウェを裏切ったからだ、という意味です。

第2の哀歌は冒頭で「ああ主は娘シオン(=エルサレム)を怒りで覆い、イスラエルの輝き(=エルサレム)を天から地に投げ落とされた。怒りの日にその足台(=神殿)を顧みようとはなさなかった」と、激しい言葉で神の怒りを歌います。しかし第3の哀歌は、「主の憐れみは尽きることがない・・・私は主を待ち望む・・・さあ主のもとへ帰ろう」と歌って、ダビデに永遠の王座を約束した神は、本来、憐れみ深い神なのだ、という信仰を告白します。

他方、コンサートの最後に、朗読と合唱とオルガンで演奏される「バビロンの川の流れの岸辺に」は、当時、バビロンに捕囚されていた詩人が歌い、後に「聖書」の「詩篇集」に取り込まれた「詩篇 137 篇」に基づく音楽です。恐らく運河修復の強制労働に服していたときに、土手に座りこみ、はるかかなたのシオン、すなわち、エルサレムを思い出して涙した詩人は、エルサレムを忘れるようなことがあったら、右手は萎え、舌は上あごに張り付けと自己呪詛をした上、なぐさみにシオンの歌を歌えと要求したバビロンの人々に対しては、楽器を木の枝にかけて抵抗した上、バビロンの女の幼な児をつかまえて岩にたたきつける者は幸いだ、と激しい呪いの言葉を投げつけました。バビロン捕囚を生き抜いた人々の思いが生々しく表現されています。彼が絶対に忘れないと誓ったエルサレムは、単なる故郷ではなく、「ダビデ契約」によって永続を約束された都であり、自分のアイデンティティーを守

る砦だったのです。

### 「聖書」の言葉の普遍化、精神化

紀元前 539 年にペルシャ王キュロスがバビロンに無血入城し、その翌年、捕囚民を解放しました。早速エルサレムへ帰還した人々は、多くの困難を乗り越えて神殿の再建に着手し、紀元前 515 年に第二神殿が奉獻されました。それから紀元 70 年にローマ人に破壊されるまで約 600 年にわたり、エルサレム神殿で積み重ねられた祭儀を通じて「聖書」が徐々に編纂され、ユダヤ人共同体が形成されました。

この活動の中から、紀元 1 世紀にナザレのイエスをキリストと信じる人々が現れました。彼らは「ダビデ契約」を新しい解釈によって説明した人々でした。その信仰によると、ナザレのイエスは、ダビデ家の子孫が王として永遠にイスラエルを治めるという神の約束を実現した「キリスト」でした。だから、この世の王ではなく、天の王国の王になったのです。同様に、天から降る新しいエルサレムに、もはや神殿は不必要です。そこでは神と「小羊」、すなわち、十字架で犠牲になったイエスが人と一緒にいるからです。こうして、イエス・キリストは、神と人が一緒にいる状態、ヘブライ語で「インマヌエル」を実現した、と言うのです。

本来、「聖書」の言葉は、すべて一定の歴史の中で語られ、その歴史的状況を反映する言葉でしたが、イエスの弟子たちはそれを精神化、普遍化したのです。これは、天の王国の正義と愛を地上で実現しようとしたナザレのイエスの生き方から、彼の死後、彼らが受けた強烈なインスピレーションによる飛躍だったと考えられます。その結果、ユダヤ人固有の思想であったヘブライズムがグローバルなヘレニズムの世界に広がり、最終的にはキリスト教が誕生しました。

\* \* \*

バビロンの川の岸辺で、はるかシオンを思い出して涙した人々は、自分たちがエルサレムに帰れる日が来るとは思っていなかったでしょう。まして 600 年後に「ダビデ契約」を再解釈して世界中の人々に生きる希望を説く人々が現れるとは、夢想もしていなかったに違いありません。むしろ、現実には、アブラハムからシナイを経てダビデに与られた契約の恵みの糸が切断され、民族が絶滅する悪夢だったのではないのでしょうか。それでも彼らはシオンを想って涙しました。そして、この涙から、偉大な復活の歴史は始まったのです。

(石田友雄)

## コラールとカンタータに 惹きつけられて

### 心を弾ませて毎週通うバッハの森

15年前、ユルゲン・アーレントさんが建造した、バッハの森のパイプオルガンに出会い、その素晴らしい音色に魅了され、バッハの森入会を決めました。「聖書を読む」の講座があったことも入会の要因です。聖書という書物は、開いてみても皆目わからず、勉強できる場を探していたところでした。

その頃、今年4月から「カンタータ入門」と名称が変更される「コラールとカンタータ」も、11年前に亡くなった、オルガニストの石田一子先生のお勧めで受講し始めました。何の知識もなく学び始めましたが、コラールやカンタータを学ぶためには、聖書の学びが不可欠であることに気付かされました。

「コラールとカンタータ」は、石田友雄先生が毎回作成してくださるドイツ語の歌詞と日本語の対訳を参照しながら、アーレント・オルガンの伴奏でコラールを、これも友雄先生の日本語訳の歌詞を皆で歌い、カンタータをCDで鑑賞する研究会です。去る2月1日に開かれた第460回目の「コラールとカンタータ」では、バッハが作曲したカンタータ「私の神よ、いつまで、ああ、いつまでですか」(BWV 155)を学びました。このカンタータの終曲で歌われるコラール「救いは私たちにあちらから来た」は、カトリックの司祭であったパウル・シュペラトウス(1484～1551)が、ルターの宗教改革に協力した罪で宗教裁判にかけられ、死刑判決を受け、その執行を待つばかりの状況下、獄中で作詞したそうです。そのような状況を知った上で、コラールの第12節を歌い、カンタータの合唱を聴くと胸がつまりました。

「たとえ神がのぞんでおられないような気配がしても、そのことに驚くな。最善の形で神が共におられるところでは、神はそれを打ち明けようとはなさらないものなのだから。神の御言葉がお前に一層確かなものになるようにせよ、たとえお前の心がはつきり否(け)と言っても、それでも恐れるな」(第12節)

なお、シュペラトウスは、彼を擁護する貴族の助けにより、死刑執行直前に解放され、ルターのところに行き改革運動に参加したと聞かされ、胸を撫でおろす思いでした。

このカンタータも、終わりが全く見えない悩みに苦しみ悶えながら、喜びを与える正しい時を神はご存知なのだと、魂を鼓舞する内容です。喜びの時は、善行によって与えられるのではなく、その時を神はご存知だという信仰によって待ち望むものだ、という宗教改革のテーゼを熱く語る先生のお話を思い巡らせながらカンタータを聴いているうちに、私は感極まって目がウルウルになり、膝の上にティッシュの山ができてしまいました。

「コラールとカンタータ」を受講し始めた頃のことだったと記憶しますが、一子先生がお若い頃、音楽に「言葉」がついているコラールに魅せられ、コラールの演奏をずっと続けて行きたいと決心されたとおっしゃっていたことを懐かしく思い出します。私がこんなにコラールとカンタータに惹きつけられるのも、言葉がついた音楽の力なのでしょう。それも説明してくださる友雄先生と一子先生のご尽力があつてのことです。

私は毎週土曜日に、バッハの森に通っています。心を込めて焼いたお茶の時間のためのケーキを車に乗せて、アクセル踏めば、私の心はもうバッハの森に！片道1時間半の道のりも何のその！一人一人がそれぞれ出来る範囲で自由に学べるこの学び舎で、みんなで声を合わせ、天に向かってご一緒に歌いませんか。(三宅利子)

### 「われらに来たれる救いは恵み」

#### “Es ist das Heil uns kommen her”

- |   |   |
|---|---|
| <p>1. われらに来たれる救いは恵み。行為(わざ)われらを護ることなし。仲保者(かたがち)となれる主イエスの御業(わざ)をわれらは仰ぐ。</p> | <p>12. 御意志(ミコトコ)見えぬも驚くなかれ。いと良き時には示しなければ。御言葉(ミコトバ)頼みて心、否(け)とも決して恐るな。</p> |
|---|---|

I. おれらにきたれる救いは恵み。  
すくもいるはめぐなみ。  
なかだちとなれる  
主イエスのみわざを。  
われらはあおぐ。

1. 9, 11 **運営委員会** 参加者各 5 名。  
 1. 10 **春のシーズン開始**  
 2. 13, 15 **運営委員会** 参加者 3, 8 名。  
 2. 15 **連絡会** (バロック・アンサンブル、ハンドベル・クワイア) 参加者 11 名。  
 3. 5, 14 **運営委員会** 参加者 3, 6 名。  
 3. 22 **創立記念コンサート** 参加者 30 名。  
 3. 23～4. 9 **春季休館**

**J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ**  
**コラール・カンタータ研究**  
**コラールとカンタータ (JSB)**

1. 11 新年祭、キリスト割礼記念祭のカンタータ「イエスよ、さあ讃美を受けてください」(BWV 41) ; コラール「主よ、誉めまつる、新たな年」。オルガン : J. S. バッハ「栄光はあなただけのものです」(BWV 41/6)、安西文子。参加者 11 名。  
 1. 18 第 459 回、オルガン : J. S. バッハ「栄光はあなただけのものです」(BWV 41/6)、安西文子。参加者 8 名。  
 1. 25 顕現祭後第 2 主日のカンタータ「私の神よ、ああ、いつまでですか」(BWV 155) ; コラール「われらに來たれる救いは恵み」。オルガン : J. S. バッハ「たとえ神がのぞんでおられないような心配がしても」(BWV 155/5)、笠間きよ子。参加者 9 名。  
 2. 1 第 460 回、オルガン : J. S. バッハ「救いは私たちにあちらから來た」(BWV 638)、笠間きよ子。参加者 9 名。  
 2. 8 顕現祭後第 3 主日のカンタータ「私は片足で墓穴に立っています」(BWV 156) ; コラール「御意志(ニコロ)のままに」。オルガン : J. S. バッハ「主よ、御意志(ニコロ)通りに、私の運命を定めてください」(BWV 156/6)、金谷尚美。参加者 12 名。  
 2. 15 第 461 回、オルガン : クリスチャン IV 世「深い悩みより私はあなたに向かって叫びます」II ; 金谷尚美。参加者 14 名。  
 2. 22 六旬節のカンタータ「私たちを支えてください、主よ、あなたの御言葉の許に」(BWV 126) ; コラール「御言葉の許に」、「主よ、授けたまえ」。オルガン : J. S. バッハ「授けてください、御恵みにより私たちに平和を」(BWV 126/6)、海東俊恵。参加者 8 名。  
 2. 29 第 462 回、オルガン : D. ブクステフーデ「私たちを支えてください、主よ、あなたの御言葉の許に」、海東俊恵。参加者 8 名。  
 3. 7 エストミヒのカンタータ「見よ、お前たち、私たちはエルサレムへ向かって上る」(BWV 159) ; コラール「主の苦しみと痛みと死は」。オルガン : J. S. バッハ「イエスよ、あなたの受難は」(BWV 159/5)、並木聡子。参加者 10 名。  
 3. 14 第 463 回、オルガン : J. C. フォーグラウ「イエスの苦しみと痛みと死は」、並木聡子。参加者 9 名。

**学習コース**

- バッハの森・クワイア (混声合唱)** 1. 11/9 名、1. 18/12 名、1. 25/9 名、2. 1/12 名、2. 8/14 名、2. 15/15 名、2. 22/12 名、2. 29/9 名、3. 7/15 名、3. 14/15 名、2. 21/16 名。  
**オルガン音楽研究会** 1. 10 /10 名、1. 24 /10 名、2. 7/10 名、2. 21/6 名。  
**コラール研究会** 1. 10 /8 名、1. 24/7 名、2. 7/10 名、2. 21/6 名、3. 6/2 名。  
**クラヴィコード・オルガン教室** 1. 10 /5 名、1. 24/3 名、2. 7/4 名。  
**オルガン・クラブ** 1. 17/3 名、1. 31/3 名、2. 14/4 名、2. 28/3 名。  
**ハンドベル・クワイア** 1. 18/6 名、2. 1/6 名、2. 15/6 名、3. 7/6 名。  
**声楽アンサンブル** 2. 8/5 名、2. 22/4 名、2. 29/5 名、3. 14/7 名。  
**読書会 : 聖書** 1. 11/5 名、1. 18/3 名、1. 25/3 名、2. 1/3 名、2. 8/4 名、2. 5/7 名、2. 22/4 名、2. 29/4 名、3. 7/4 名、3. 14/5 名。  
**ハンドベル・リンガーズ** 1. 19/9 名、2. 16/13 名、3. 15/8 名。  
**声楽教室** 1. 11 /3 名。  
**チェンバロ教室** 1. 10/2 名、2. 7/2 名。  
**オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習**  
 1. 8/1 名、1. 9/1 名、1. 10/3 名、1. 11/2 名、1. 14/1 名、1. 15/1 名、1. 16/1 名、1. 17/4 名、1. 18/1 名、1. 21/1 名、1. 22/2 名、1. 24/3 名、1. 25/2 名、1. 28/2 名、1. 29/1 名、1. 30/1 名、1. 31/3 名、2. 1/2 名、2. 4/2 名、2. 5/1 名、2. 7/3 名、2. 8/2 名、2. 12/2 名、2. 13/2 名、2. 14/6 名、2. 15/2 名、2. 16/2 名、2. 18/1 名、2. 19/1 名、2. 20/1 名、2. 21/3 名、2. 22/2 名、2. 25/1 名、2. 26/1 名、2. 27/2 名、2. 28/3 名、2. 29/1 名、3. 3/1 名、3. 4/1 名、3. 5/1 名、3. 6/1 名、3. 7/2 名、3. 10/1 名、3. 12/1 名、3. 13/3 名、3. 15/1 名、3. 19/2 名、3. 21/1 名、3. 22/1 名、3. 25/1 名、3. 26/1 名、3. 27/1 名、3. 31/1 名。